第 52 章

エテル 11 - 15 章

はじめに

エテル書にはかつての偉大な国民が滅亡に至った悲劇が語られている。この滅亡の話は、預言者たちを拒むことが必然的に招く結果と、際限なく罪を犯すことが招く悲惨な結末を知る助けとなる。それとは対照的に、イエス・キリストを信じる信仰についての深遠な教えも読むことができる。預言者エテルとモロナイの教えはともに、信仰が悔い改めをもたらし、奇跡を起こし、個人の弱さを強さに変えることを示している。悲しいことに、ヤレド人はエテルの教えに耳を傾けるのを拒み、自分たちを救う力のあった真理を捨てた。エテル11 – 15 章を読むとき、次のことについて自問する。「わたしは、また今の世代の人々は、これらの章からどのような教訓を学べるだろうか。」

注解

エテル 11章 ヤレド人の文明の終わり

・ニーファイ人がそうであったように、ヤレド人の社会もまた、繁栄、背教、裁き、悔い改め、そして繁栄というサイクルを繰り返した。そして最終的には、やはりニーファイ人と同じように、背教と悪事が致命的なほど深刻なものになっていった(付録 398ページの図「義と悪のサイクル」参照)。エテル11章には、ヤレド人が陥った背教のサイクルの最終段階が語られている。民は預言者たちを拒み、あざけり、ののしった。シュール王は預言者たちを守り、預言者を追害する者を罰する法律を定めたが(エテル7:23 - 26 参照)、後の王は預言者たちを処刑する方針を出した(エテル11:5 参照)。結局、悪事があまりに蔓延したために、預言者たちは「悲しみながら民の中から去って行った。」(エテル11:13)(265-266ページにあるヒラマン12:5-6の注解参照)

エテル 11:2-5, 13, 20-22 彼らは預言者たちの言葉を拒んだ

•預言者アモスは、預言者の役割の一つは滅亡が迫っていることを民に警告することであると教えている(2ニーファイ25:9参照。エゼキエル33:7-10も参照)。エテル11章には、預言者の警告を心に留めないとどのような結果になるかがはっきりと示されている。預言者の勧告を拒むことの代償と、預言者に注意を向けることで得られる安全に関して、大管長会のヘンリー・B・アイリング管長が述べていることについて深く考える。

「信仰深い人にとって、預言者の勧告の中に安全への道を 求めるのは当然のことです。預言者が語るとき、信仰の弱 い人々は単に賢人が良いアドバイスを与えていると考えます。 ですから、その勧告が心地よく、理にかなっていて、自分の 望みに合うようであれば受け入れます。でもそうでない場合 は、その勧告を誤りであると決めつけたり、自分の置かれた 状況はその勧告には当てはまらないと考えるのです。また 信仰のない人は預言者の言葉を、利己的な動機で人に影響 を与えようとしているとしか考えません。……

自分の人生を振り返ってみると、霊感を受けた勧告になかなか従わなかったり、自分の場合は例外だと決めつけてしまったりしたときはいつも、自分を危険にさらしていたことが分かります。 逆に、預言者の勧告に耳を傾け、祈りを通してそれを確認し、その教えに従ったときには、自分が安全な方向に向かっていることが分かりました。」(『聖徒の道』 1997年7月号、28-29)

エテル 11:7-8 自然災害が悔い改めをもたらすことがある

• ここには戦争や飢饉, 疫病, 滅亡の結果, 民が罪悪を悔い 改め始めたことが書かれている。時々, 主は御自分の子らに

悔い改めさせるために自然災害を用いられることがある。わたしたちがこのことを理解できるように、ジョセフ・F・スミス大管長(1838 - 1918年)は次のように説明している。



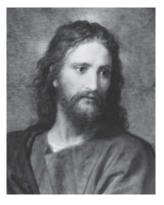
「末日聖徒は、自らの悪事と罪のためにおののきますが、罪悪のために大いなる裁きが世に訪れようとしていることを信じています。キリストが裁きのために降臨されるしるしとして、災害が諸国のうえに降りかかるという聖典の言葉を固く信じています。また、神が火事、地震、津波、火山の噴火、さらに嵐をも治められると信じています。末日聖徒は神が自然と自然の法則の統治者であり、すべてのものの中に神の手があることを認めています。また、人類が神の力と目的を意識し、罪を悔い改めて、キリストが再臨して地上で正義の統治を開始されるのに備えられるように、神の裁きが下されていると、わたしたちは信じています。……

これらの深刻な自然災害は、主の子らが隣人に仕え、また主を愛し、主に仕えることができるよう、神の子らの利益のために主が与えられるものであるとわたしたちは信じています。」($Gospel\ Doctrine$ 、第 5 版 $[1939\ 4]$ 、55。 主が悔い改めを拒む人々に対して語るために自然の力を用いられることについては、ヒラマン 12:3; 教義と聖約 43:21-25; 88:88-91 も参照)

エテル 12:4 「人々にとってその心〔の〕錨となる」

• ゴードン・B・ヒンクレー大管長 (1910 - 2008 年) は、イエス・キリストを中心とした生活を送ることの必要性につい

て次のように教えている。 「わたしたちは不確かな世に 生きています。ある人にとっ ては偉大な達成の日となり, ほかの人にとっては落胆の日 となるかもしれません。 と楽しみ,健康,感謝に満ち た日々を送る人もいれば,病 気や悲しみに見舞われる人も いることでしょう。わたした ちには分かりません。しかし



一つはっきりと知っていることがあります。天の北極星と同じように、将来に何が起きようと、世の贖い主、神の御子は、わたしたちが不死不滅の命に至るための力強い支えとして確かに間違いなく存在しておられる、ということです。主は救いの岩であり、わたしたちの力、慰めであり、信仰の中心であられます。」(『リアホナ』 2002 年 7 月号、101)

エテル 12:4

エテル 12:6 🔳 「信仰が試され〔る〕|

•信仰の試しは必ずしも逆境という形でやって来るわけではない。十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は、「信仰が試され〔る〕」とは、単にわたしたちが信仰を働かせるかどうかにかかっている場合があると教えている。「モロナイが教えた次の原則を応用することによって、もっと効果的に信仰を使えるようになります。『信仰とは待ち望んでいながらまだ見ていないものである……。あなたがたは、自分が見ていないからということで疑ってはならない。信仰が試されてからでなければ、証は得られないからである。』〔エテル12:6、強調付加〕ですから、信仰を試す度に、勿霊による確認の証を受けるのです。そしてこうした気持ちは信仰を強めてくれます。この経験を繰り返すにつれて、信仰はさらに強くなります。」(『リアホナ』 2003 年 5 月号、76)

- 十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、わたし たちが経験する様々な段階の信仰と、そのような信仰を表す ために不可欠なものについて書いている。「準備の段階の 信仰は、過去の経験によって、すなわち既知のものによって 形成され, それが信じる土台となる。しかし, 贖いに至る信 仰は、しばしば未来の経験に向けて、すなわち未知のものに 向けて働かせなければならず、それによって奇跡的な事柄を 見る機会が得られる。厳格な信仰, 山を動かすほどの信仰. ヤレドの兄弟が持っていたような信仰は, 奇跡と知識に先立 つものである。ヤレドの兄弟は、神が語られる*前に*信じなけ ればならなかった。行動を完遂する能力のあることが明ら かになる前に行動しなければならなかった。最初の部分す ら実現していないときに、最後に至るまでのすべてに献身し なければならなかった。信仰とは、何であろうと近い将来 および遠い将来に神が求められる事柄に対して. 無条件に. そして事前に同意することである。」(Christ and the New Covenant [1997年], 18-19)
- ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、信仰が「試されてから」証を得るというこの原則について次のように説明している。

「ブラジルのサンパウロに住むある女性の体験です。彼女は家計を助けようと、働きながら学校に通っていました。彼女の言葉をそのままお伝えします。こう書いてあります。

『わたしが学んでいた大学には、授業料滞納者は試験を受けられないという規則がありました。それで、給料をもらったら什分の一と献金を取り分け、残りを授業料やその他の費用に充てていました。

あるとき、……経済的にとても大変な状況に陥りました。 給料を受け取ったのは木曜日です。その月に支払う費用を 計算したわたしは、什分の一と授業料の両方を納めるのが 不可能であると気づきました。どちらかを選ばなければな りません。隔月の試験が翌週から始まることになっており、 それを受けないと留年してしまいます。とても悩みました。 ……心が痛みました。難しい決断です。どうしたらいいの か分かりません。二つの選択肢の間で揺れ動きました。什 分の一を納めようか。でもそうすると、大学に残るために必 要な単位が取れなくなってしまうかもしれない。

この関やとした思いは土曜 日まで続きました。でもその とき、思い出したんです。バ プテスマを受けたとき、什分 の一の律法に従うことにも同 意したのだった、と。わたし は宣教師にではなく天の御



父に対してその義務を引き受けたのです。そう思った瞬間, 苦しみは消え去り,心地よい安らぎと決意に変わりました。

その夜、わたしは祈りの中で自分の優柔不断さについて 主に赦しを請いました。日曜日、わたしは聖餐会が始まる前 にビショップと会い、大いなる喜びをもって什分の一と献金 を納めました。特別な日でした。自分と天の御父に対して 幸福と平安を感じることができました。

翌日、わたしは職場で水曜日に始まる試験を受ける方法はないものかと考えていました。考えれば考えるほど、解決の道が遠のいていくように感じられます。 ……

勤務時間が終わりに近づいたころ、所長はわたしに最後の仕事を言い付けました。そしてかばんを手にしてあいさつをすると、その場を去ろうとしました。……ところが、急に足を止めるとわたしの顔を見て、こう聞くのです。「大学はどう?」驚きました。耳を疑いました。わたしは震える声で「何とかやっています」と答えるのが精いっぱいでした。彼は考え込んだ様子でわたしをじっと見ると、またあいさつをして出て行きました。……

突然, 秘書の女性が入って来て, あなたは幸運な人だと言います。理由を尋ねると, 彼女はこう答えました。「所長が, 今日から先あなたの大学の授業料と教材費は全部事務所で払ってあげなさいって。帰る前にわたしの席に立ち寄って費用を教えてください。明日小切手を切りますから。」

秘書が部屋から出て行った後で、わたしは泣きながら、心からへりくだってその場にひざまずき、主の寛大さに感謝しました。わたしは……天の御父に過分な祝福ですと申し上げました。必要だったのは1か月分の支払いだけで、日曜日に納めた什分の一は受けた祝福と比べればごく少額なのです。祈りの中で、マラキ書に書かれた言葉が思い出されました。「これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:10)わたしはそのときまで、その聖句にある約束の大きさが実感できませんでしたが、確かにこの戒めは地上の子供たちへの天の御父の愛のしるしなのです。』」(『リアホナ』 2002 年7月号、81-82)

エテル 12:6 🏢

アルマとアミュレク, ニーファイとリーハイ (ヒラマンの息子たち), アンモンとその兄弟たちは, 教えられている原則をどのように証明したか。

エテル 12:8 - 22 信仰と奇跡

• エテル 12:8-22 には「信仰によって行われた数々の不思議と驚くべきこと」の例がたくさん述べられている (エテル 12 章の前書き)。『信仰に関する講話』(Lectures on Faith) には、信仰は奇跡を行う力の源であると説明されている。

「信仰は行動の原動力であるだけでなく, 天地のすべての 知性ある存在にとって, 力の源である。 ……

……もろもろの世界は信仰によって造られた。神が語られ、混沌とした状態がそれを聞き、神のうちにあった信仰によってもろもろの世界が秩序ある状態となったのである。人についても同様である。人が神の御名を信じる信仰によって語ると、太陽は静止し、月は従い、山々は移り、草は崩れ落ち、ライオンの口は閉じられ、人間の心から敵意が消え、激しい炎は鎮まり、軍勢はその力を失い、剣から恐怖が取り除かれ、死は支配する力を持たなくなった。このすべてが、人のうちにある信仰によって行われたのである。」(〔1985 年〕、3、5)

エテル 12:27 國 弱さと謙遜さと恵み

• アダムの堕落によって、人間には弱さが与えられている。 肉体は病気にかかりやすく、精神は退廃しやすい。わたしたちは誘惑を受け、もがき苦しむ。それぞれが自分の弱さを経験する。それにもかかわらず、主がはっきりと教えておられるように、わたしたちが信仰をもって謙遜に主のもとに行くとき、主はわたしたちの弱さを強さに変えてくださる。わたしたちを自らが生まれ持っている能力よりも高く引き上げることによってこの変化を起こしてくださるほどに、主の恵みは十分なのである。非常に個人的な方法で、わたしたちは贖罪の力がどのようにして堕落の影響に打ち勝つかを経験するのである。

十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老(1926 - 2004 年)は、わたしたちが弱さを克服するのを主がどのように助けてくださるかについて、次のように語っている。「聖文には人の『弱さ』について書かれている箇所がありますが、この『弱さ』には、人の霊が絶え間なく肉体の影響を受けてしまう一般的な状態において、だれもが生来持っている、避けることのできない弱さが含まれます(エテル12:28 - 29 参照)。しかし同様に、弱さには個人特有のものも含まれ、わたしたちはそのような弱さを克服するように期待されています(教義と聖約66:3;モルモン書ヤコブ4:7参照)。人生においては、こうした弱さがあらわになるものです。」(Lord. Increase Our Faith [1994 年]、84)

さらに、マックスウェル長老は自分の弱さを認めることが、

わたしたちが多くを学べるように主が選ばれた一つの方法 であると述べている。

「確かに、全知全能の神が定められた時を待ち切れない人は、自分が最善の方法を知っていると言っているようなものです。おかしなことに、腕時計をしている人間が、宇宙の時と暦を管理しておられる主に忠告しようとするのです。

神はわたしたちに、御自分や御子のようになってみもとに帰るように願っておられます。そこでその成長の過程で欠かせないのが、わたしたちの弱さを明らかにすることです。したがって、もし永遠の希望を抱いていれば、わたしたちは従順になるでしょう。主の助けによって、弱さを強さに変えることができるからです(エテル12:27参照)。

しかし、自分の弱さを指摘されるのは、たやすいことではありません。生活の中で繰り返しそれが現れてくるからです。しかし、これは『キリストのもとに』来るための一段階であり、もし苦痛を感じれば、それは神の幸福の計画に欠かすことのできない部分なのです。」(『リアホナ』 1999 年 1 月号、67 - 68)

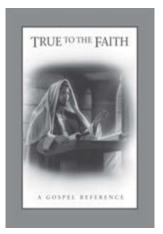
聖文は、イエス・キリストがわたしたちをその罪からと同様に、その不十分な点からも救うことがおできになることを 証している。

- 1. 「それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。」(2 コリント12:9)
- 2. 「だから, わたしたちは, あわれみを受け, また, 恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために, はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。」(ヘブル4:16)
- 3. 「主なる神はわたしたちの弱点を示される。それは、このようなことを行う力がわたしたちにあるのは、神の恵み ……によるということを、わたしたちに分からせるためである。」(モルモン書ヤコブ4:7)
- 4. 「わたしは自分が何の価値もない者であることを知っている。わたしは力の弱い者である。だから、わたしは自分のことを誇るつもりはない。しかし、わたしは神のことを誇ろう。わたしは神の力によって何事でもすることができるからである。」(アルマ 26:12)
- 5. 「もしあなたがたが神の御心に添わないものをすべて拒み,勢力と思いと力を尽くして神を愛するならば,神の恵みはあなたがたに十分であり,あなたがたは神の恵みにより,キリストによって完全になることができる。」(モロナイ10:32)

モロナイは、わたしたちは主を信じる信仰を働かせなければならないだけでなく、へりくだらなければならないと教えている。

『真理を守る』には、真の謙遜さについて次のように説明 されている。「謙遜とは、自分が主に頼らなければならない

ことを、感謝の思いをもってがいること、すなわち自分がいることを理解することを理解することを理解することをもない。 がは、自分の才だ場物ではない。 が神から与えられただ場でなることを認めることを認めることを認めることを認めることを認めることをあることを認めることを認っているということをいうことをいうことをいう。」(『真理を守る —— 福



- •『聖句ガイド』には次のように書かれている。恵みとは「信仰を実践し、悔い改め、全力を尽くして戒めを守る人に神から授けられる力。この力によって、人はこの世で数々の祝福を受け、永遠の命と昇栄を授かることができる。このような神聖な助けや力は、神の憐れみと愛を通して授けられる。」(「恵み」の項)
- ・トーマス・S・モンソン大管長は、次のような慰めの言葉を与えている。「もし浮き沈みする人生を自分の弱さのために変えられないと思っている人がいるなら、あるいは、失敗を恐れるあまり改善する決心がつかない人がいるなら、主の次の言葉ほど、確かな慰めをもたらすものはないでしょう。『わたしの前にへりくだるすべての者に対して、わたしの恵みは十分である。もし彼らがわたしの前にへりくだり、わたしを信じるならば、そのとき、わたしは彼らの弱さを強さに変えよう。』」(『リアホナ』 2000 年7月号、58 59)

エテル 12:32

エテル 12:32; モロナイ 7:40 - 41; 教義と聖約 138:14 によれば, わたしたちの望みは何を 中心とするものであるべきか。そのような望みを 強めるために何ができるか。

エテル 12:33 - 37 この愛は慈愛である

・救い主はわたしたち一人一人のために御自分の命をささげ、贖いの業を行うことで、最も完全な慈愛、すなわち犠牲的な愛を示された。わたしたちは永遠の命を受け継ぐために、「この愛で満たされるように | 祈らなければならない (モ

ロナイ7:48)。十二使徒定員会のマービン・J・アシュトン 長老 (1915 - 1994 年) は, 慈愛を持つとはどういう意味で あるかについて次のように説明している。

「この慈愛という言葉は、多くの場合誤解されているのではないでしょうか。慈愛とは病気の人を見舞ったり、貧しい人々に食物を届けたり、困っている人々に余ったものを施すことであると考えがちです。しかし本当の慈愛には、もっと多くの意味があります。

本当の慈愛は、相手に何かを与えたかではなく、自分がどのような特質を身に付けたかによって計られます。この慈愛という徳が心に植えられると、二度と元の自分に戻ることはありません。〔人を悪く言うこと〕など考えるのも嫌になります。

恐らく最も大いなる慈愛は, 互いに親切にし, 人を裁いたり, 格付けをしたりせず, 相手の言動を良い方向に受け止め.

口を慎むときに示されるのではないでしょうか。慈愛とは、人の相違点や弱点、欠点を受け入れ、自分を落胆させた相手に忍耐し、人が自分のなかしてくれないに感情を害したとして、衝動的な怒りを抑えるにも、衝動的な怒とは人の弱点にないた人を赦すことをもなった人を赦すことである。そして、相手の最も良い点に



心を向けることです。」(『聖徒の道』 1992 年 7 月号, 20 参 照)

エテル 12:41 とどまる

・チリで1年間生活した後、ジェフリー・R・ホランド長老は「とどまる」と訳されている英語の"abide"という語に関して次のように語っている。「『わたしにつながっていなさい』(Abide in me)は、欽定訳聖書の上品な英語で語られた、分かりやすい美しい概念ではありますが、"abide"という言葉は現代ではあまり使われていません。ですからこの表現を別の言語で知ったとき、この主の勧告に対する感謝の念が深まりました。この言い回しはスペイン語で『ペルマネセーデンミ』(permanced en mi)と言います。『ペルマネセール』(permanecer)は英語の動詞"abide"と同じく、『とどまる、滞在する』という意味です。しかしわたしのような外国人でも、この言葉の語源が、英語の"permanence"つまり『永久』と同じであることが分かります。つまり『永

久にとどまる』というニュアンスになります。」(『リアホナ』 2004 年 5 月号、32)

エテル 13:1-12 新エルサレム

- ・エテル13:1-12では、エテルがいかに偉大な聖見者であったかが述べられている。エテルは、主の再臨に先立つ新エルサレムの建設を含め、多くの驚くべきことを主から見せられた。新エルサレムについてエテルが述べていることに注目する。
- 1. 「主の聖所」となる (エテル 13:3)。
- ヨセフの子孫の残りの者のためにアメリカ大陸に築かれる(4-6節参照)。
- 3. 主のために築かれるエルサレムのような聖なる都となる $(8-9 \hat{m} \otimes \mathbb{R})$ 。
- 4. 地球が日の栄えの状態になるまで存続する(8節参照)。
- 5. 清く義にかなった人々のための都となる(10節参照)。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長 (1876 - 1972年) は、新エルサレムについて次のように書いている。

「これ [新エルサレム] は再生の日に更新される昔のユダヤ人の都, エルサレムであるとする世間一般の考え方がありますが, これは正しくありません。エテル書を読めば分かるように, 主はエテルに, ヨハネが先見したのと同じことを数多く啓示しておられます。 教会員は知っていると思いますが, エテルはヤレド人の中の最後の預言者でした。主はエテルにユダヤ人の歴史と, わたしたちの救い主が教え導かれた時代にあった彼らの都エルサレムについて多くのことを啓示されました。ヨハネの場合と多くの点で似通っていますが, エテルは示現の中で, 昔のエルサレムの都とまだ建てられていない新しい都を見ました。そして, モロナイの記録にあるように, それをこう記しています。

[エテル 13:2-11] ……

すべてのものが新たにされる再生の日には、3つの偉大な都市があって、聖なる所となるでしょう。一つはエゼキエルの預言に従って再建された昔からのエルサレムです。もう一つはエノクが身を変えられたときに地上から取り去られ将来回復される、エノクまたはシオンの町です。そしてヨセフの子孫によってこのアメリカ大陸に建てられるシオンの町、すなわち新エルサレムです。 $\int (Answers\ to\ Gospel\ Questions$ 、ジョセフ・フィールディング・スミス・ジュニア編、全5巻 [1957 – 1966年]、第2巻、103-104)

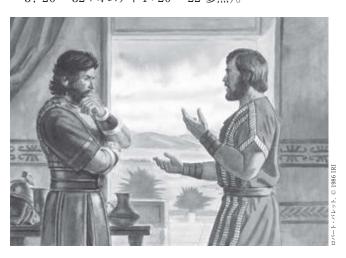
エテル 13:1-12

これらの節には、新エルサレムの特徴としてどのような ことが挙げられているか。そのような特徴を、 わたしたちはどのようにしてはぐくむことができるか。

エテル 13:15 - 31 コリアンタマー

• コリアンタマーは多くの時間を費やして「あらゆる戦術と世のあらゆる悪知恵」を研究していた(エテル 13:16)。 しかし、いかなる戦術をもってしても得られない方法で平安をもたらしたであろう、エテルの素朴なメッセージを拒んだのである。

エテル 13:20-21 で預言者エテルがコリアンタマーに約束していることと、その約束の成就に注目する (エテル 15:1-3, 26-32; オムナイ 1:20-22 参照)。



エテル 14 - 15 章 ヤレド人の最後の戦い

・コリアンタマーとシズは自分たちに従うすべての者が殺されるまで戦いをやめようとしなかった。わたしたちは、女や子供までが武装して戦場に送られたヤレド人の最後の壮絶な戦いを、完全に理解することはできない(エテル 15:15参照)。しかし、わたしたちはここに、主の御霊が退き去り、人を励ますことをやめると人はどうなるかということをはっきり見ることができる(19節参照)。



理解を深めるために

- すべてを可能にする贖罪の力は、これまでどのような形で あなたの弱さを強さに変えてくれただろうか。
- エテル書はどのような点で、今日のもろもろの国民への警告となっているだろうか。
- 怒りと憎しみはヤレド人が滅亡する大きな要因となった。 今日の世の中において、怒りと憎しみはどのような影響を 及ぼしているだろうか。あなたにできる範囲で、そのよう な影響にどのように対抗することができるだろうか。
- これまでどのような信仰や霊性の試しを受けてきただろうか。信仰が試されたことで、イエス・キリストについての「証」や永遠の真理についての理解がどのように深まっただろうか。

割り当ての提案

- 人間の弱さのゆえに受けているあなた個人の欠点や足りない点を一つ挙げる。エテル12:27 個を参考にしながら、弱さを強さに変えるための計画をまとめる。
- モロナイの次の嘆願について深く考える。「預言者たちと使徒たちが書き記してきたイエスを求めるように、あなたがたに勧めたい。そうすれば、父なる神と主イエス・キリストと……聖霊の恵みが、とこしえにあなたがたの内にとどまるであろう。」(エテル12:41)「イエスを求め」て「父なる神……の恵み」を得るためにできることを要約して書く。